

## 音色王国 -第三章-

### ユコちゃん

モカとココロがアトリエ・ココ店内を歩いていました。

「ダミダミだねっ！」

「へ？」

突然モカが鼻の詰まったようなダミ声で話してきました。

「オーナーってダミダミだねっ！」

「だから何が？」

モカのわけの分からない行動にどうして良いか分からず、思わず笑ってしまうココロ。

「ルンピィの真似。ルンピィがダメダメって言うとダミダミって聴こえるんだよお！」

とっても楽しそうにルンピィの声の特徴を話すモカ。

ルンピィとは、モカととっても仲の良い紅茶職人の女の子です。

「確かにダミダミって聴こえるね」

しょうもない話題で盛り上がる二人はカフェコーナーに向かうため、店内の角を曲がりました。

すると、目の前に前髪が揃った小さな小さな女の子がひょこんと立っていました。

「誰？」と思うより先に「かわいい」と反応し、前のめりになる二人。

「君だあれえ～」モカが女の子に勢い良く駆け寄ります。

すると「はっ！」とビックリした女の子は向こうの方に逃げるように駆けて行きました。

「あれえ～?!」なぜ逃げるのか疑問に思いながら、モカも負けじと追いかけます。

女の子が角を曲がろうとしたとき、アンティロが出てきました。

「アンティロお～！その子その子！」

「ええ～?!」

慌て口調のモカにどうしたらいいのか分からず、戸惑ってしまうアンティロ。

突然現われた男の子に前のめりでぶつかり、女の子はそのまま角を曲がって行きます。

アンティロはその反動でふらふら、くるくるになって床にぺちゃんこ倒れてしまいました。

「もぉ！アンティロしっかりしてよぉ！」

床に寝転がった、へなちょこアンティロを「ひょいっ！」と飛び越えて行くモカ。

「アンティロ大丈夫う？」

後を追いかけてきたココロの声援に手をゆっくり上げて答えます。

「ごめんよお」

ココロもアンティロの上を「ひょいっ」と越えて二人の後を追いかけます。

〔トコトコトコトコッ！〕

小さな歩幅にもかかわらず、とっても速い女の子。

また角を曲がります。

モカも「いよいよ」という距離まで追いつき角を曲がり切りました。

すると商品の在庫をメモ帳に記入しているセルバが立っていました。

女の子は彼の後ろに隠れました。

「ええ～～？！なんでえ？！」

トトトッ、ステップを踏んで慌てて立ち止まるモカ。

ココロも追いつきました。

「ええ～？！セルバの子供お～？！」

モカは良く分からないこの状況に、思わずセルバの隠し子説を唱えました。

というセルバ本人は、明らかに「誰だこの子？」と言ったご様子。

ちょっと間を置いて、アンティロとリヨがやってきました。

女の子はセルバから離れ今度はリヨの後ろに隠れました。

「ええ～？！！リヨちゃんの子供お～？！！」

もう何がなんだか分からなくなり、やけになるモカ。

〔ポンッ！〕モカの頭にメモ帳がちょっと強めに落ちてきました。

「みゃっ！」衝撃で目を瞑るモカ。

「うるさいぞモカっ！」

セルバがモカを大人しくさせてくれました。

「同じ前髪パツツンだし。その子リヨの妹たる？まさかモカの言うとおりその子のお母さん？」

と冗談交じりで話を続けます。

「ちっ違いますよお！妹です妹っ！ もお、モカあ～」

否定しながらもちょっとお母さん役を想像して、ムフと含み笑いをしながら話すりヨ。

「へえ～そっかあ～」ココロが頷きました。

カフェコーナーに集まったみんなに、妹のことについて話してくれたりヨ。

どうやら、「おとどけ村」の実家から「おとどけ屋」のお仕事を覚えるために

アトリエ・ココにやって来たようです。

やってきたというより、布団やお洋服、お手紙セットなどなどと一緒に

トラックに詰められて送られて来たようです。

【みゆ～みゆ～さん（族）】達の世界は義務的な学校が存在しません。

その代り何処かのお店にお世話になり、お仕事を通じて社会で生きていく知恵や技術を学んでいきます。

子供の頃から色々な年齢の人たちと付き合うことになるので、考え方も多様化し、

また、みゆ～みゆ～族特有の高い想像性と好奇心も育まれているようです。

そういうことで、ユユをアトリエ・ココでしばらくお世話することになったのですが・・・

「って！ちょっと待てえ！ オレは聞いて無いぞお まずはオーナーを通せ、オーナーをお！」

どうやら、オーナーのココロが知らないところで話が進んでおり、納得の行かないご様子。

個人的には全然問題ないものの、これでもお店の代表者、

許せることと許せないことはちゃんと説明しなくてはなりません。

幼くて今の状況を理解出来てないユユの前では、なお更です。

小さくても一人の従業員になるのですから。

「え？昨日言いましたよ。妹が今何処でお世話になれば良いのか悩んでるって話。

オーナーも良かったらウチに来てもいいって」

なんでそんなに驚いてるの？といった感じで話すりヨ。

「いや、確かに昨日聞いたけど、オレはてっきりもっと先の話かと・・・」

少し考えて、今はユユの不安感を和らげた方が良くないと判断したココロオーナー。

「うん、リヨちゃんからも話は一応聞いてたし・・・ ユユちゃん、よろしくね」

なんだかココロのせいもあって、後味の悪い終わり方になってしまいました。

「よろしくね ユユちゃん」モカも早く仲直りしたくて、すかさずご挨拶。

「うん」と軽く頷くユコ。まだモカを少し警戒しているご様子。

〔ユコちゃんの大冒険〕

アトリエ・ココ店内にて。  
ご飯を食べ終え、みんなバラバラになったお昼過ぎ。  
アトリエ・ココの新メンバー・ユコは、行く当てもなくふらふら。  
とりあえず、メンバーの個人部屋になっている二階から上を探検することにしました。  
初めての一人探検にちょっとワクワク気味。  
階段の段差はユコの歩幅にはちょっと大きくて上るのも大変そう。  
天井まで吹き抜けの空間はユコちゃんにはとっても広いお空に見えました。

大きなお風呂を発見したり、通路に置かれた棚の小物に手を伸ばしてみたり。  
手すりに動物の横顔が彫られているのを発見したり。  
二階を探検し終わろうとした頃、温かい光が漏れる半分開いた扉を見つけました。  
中を覗くとミュージアがぺちゃんと床に座ってお絵描きをしていました。  
気になるあまり無意識に扉を開けてしまいました。  
扉に付いていたベルの音が部屋に響き渡ります。  
ですが、ミュージアはその音に気づきませんでした。  
何を描いてるんだらうと、さらにミュージアに近づきます。  
そしてミュージアの横にしゃがみこんで、筆先から広がる色の世界を眺めていました。  
それはユコにはまだ分からない色だけの世界。  
でも、その世界はとっても心地よくて、いつの間にかミュージアに寄り添って寝てしまいました。

「あれ・・・？ユコちゃん？どうしたの？」  
絵の世界から戻ってきたミュージアはユコにようやく気づきました。  
「絵見てたの。そうしたら・・・そうしたら・・・」  
ちょっとまぶたが重そうなユコ。

「ん？眠たいの？ちょっとお昼寝する？」

「・・・、うん・・・」

よいしょ、長いワンピースを揺らしながらミューチがゆっくり立ち上がりました。

「お昼寝するときはアンティロのお部屋だね。」

眠たそうなユコの手を引っ張って、アンティロの部屋に向かいます。

〔コンコンッ〕

「アンティロいる？」

・・・返事がありません。

「いるはずなんだけどなあ・・・」

お返事が無いので、ゆっくり扉を空けました。

部屋の中には形の異なったベットが3台並べてありました。

そのベットの中の一台でやっぱりお昼寝中のアンティロ。

人の気配で目を覚ましたようです。

「お昼寝中ごめんね。この子にベットを貸して上げてくれる？」

「・・・うん、良いよお～、ちょっと待ってえ～」

ゆっそりベットから起き上がって、ユコの眠りやすいベットを選ぶアンティロ。

ユコをベットに寝かせて、次は沢山の枕が掛かった棚に向かい選び始めました。

アンティロは『おねむり王国』出身で寝るのが大好きな男の子です。

ベットの収集や枕の収集が趣味でこの部屋に収まらないほど沢山持っています。。

睡眠のことにも詳しくて、睡眠の先生みたいなこともやってたりします。

ユコは、街中をお散歩していました。

とてもとってもふかふかの地面を、ふうおんふうおんと歩いて行きます。

「おや？お嬢ちゃん、お出掛けかい？」

まんまるの水色サンタが話しかけてきました。

サンタさんは沢山の風船を持っていました。

「旅のお供に風船はいかがかな？」

ユユは元気一杯にうなずきました。

「どの風船が欲しいのかな？」

ユユが指差したのはサンタさんでした。

「そうかわシかぁ」

するとサンタさんは大きく膨らみ、雲のような白い風船になりました。

ユユは雲風船に乗っかり、空に浮かんで行きます。

〔パンッ！〕

先に浮かんで行った風船が大きな音を立てて割れました。

〔パンパンッ！〕

割っていたのはユユと同じぐらいの小さなユニコーンでした。

角の形がソフトクリームみたいです。

「割っちゃだめだよ～！」

ユユは雲風船の端から身を乗り出し注意しました。

すると今度はユニコーンがこっちに向かって来ました。

「なんだお前は？風船は割るものだぞ！」

ユニコーンは角を縦に振って威嚇しています。

「風船は膨らませるものだよ！」

こっちも負けじとほっぺたを膨らませ威嚇します。

「なんだとぉ～ お前のほっぺも割ってやろうか！」

怖くなったユユはほっぺたを小さくしました。

「何だよ？もう降参か？」

掛かって来いと言わんばかりに、角でユユの足元をこつきます。

「ソフトクリームう！」

ユユは勇気をだして、角をがっしり掴み、大きく叫びました。

すると、角はチョコとバニラが渦になった、おいしいソフトクリームになりました。

ユニコーンは「返せ返せ」とユユを追いかけます。

ユユはすっころんでしまい、ソフトクリームは無残な姿になりました。

ユニコーンは泣き出しました。

ユコはとっても後悔しました。

なんとかしてあげたい、なんとかしてあげたい。

ですが周りをキョロキョロしても何もありません。

ふと足元を見ると雲があることに気づきました。

これを使って、角を作ろう。

「馬さん、ちょっと待っててね。すぐに元通りにするから！」

ユニコーンは、なぜかさらに落ち込みましたが、馬声でうなずきました。

ユコは一生懸命、雲を引き伸ばし角を作っていきます。

ですが、雲の強度では、さっきまでの頑丈な角は作れません。

でも、ユコはそのふんわりした角を馬さんにつけてあげました。

角は風になびいて、背中の方に流れました。

すると、全体が白銀に輝きだし、体も大きくなっていきました。

輝きが消えるとそこに素敵な白馬が現れました。

「ありがとうお嬢さん！君が呪いを解いてくれたんだね！」

どうやら、この白馬は昔、白ひげが無いことに悩んでいたサンタさんに、

たてがみを奪われ、代わりにソフトクリームをつけられ、小さなユニコーンにされていたようです。

しかもソフトクリーム自体も呪われており、

風船なんて割れてしまえば良い、という悪しき心を宿してしまったのです。

「さあ、お嬢さん、背中に乗って！」

ユコは背中によじ登りました。

白馬は勢い良く前足を上げると同時に大きな翼を広げました。

ユコは、大きくてふわふわの羽に包まれ、幸せな気分になり静かに目を閉じました。

白い布団に、まるで埋もれるように寝ていたユコ。

部屋の中を見渡すとアンティロの姿が見当たりません。

静かな部屋の中で一人目を覚まし、ちょっと寂しくなったユコは廊下に出ました。

すると下の階から楽しそうな音楽が流れていることに気づきました。

ミュージックも気になったのか、大きな筆を持ったまま部屋から出てきて、下の階に耳を傾けています。

「ユユちゃん、おはよう、なんか楽しそうだね、行ってみようか。」  
眠気も消えたのか、ユユは元気に階段を下りて行きました。

〔音色王国のチェレスとスピネット〕

〔カランカランッ〕  
色んな楽器を背負ったり、体に身につけた二人がやってきました。  
「いらっしやいませ〜」  
元気良くモカがお出迎え。  
「こんにちは。音色王国から来たチェレスですが、オーナーさんいらっしやいますか？」  
ちょっと大人のお姉さんが丁寧にご挨拶してきました。  
彼女の首からはアクセサリーのような小さな笛やハーモニカ、  
肩からは大きな箱型のカバンを下げています。  
「少しお待ちくださいね。」  
何かを思い出したかのように、笑顔が一回り大きくなるモカ。  
カウンターにいたランクにウインクをして急ぎ足でオーナーを呼びに行きました。  
「チェレスさんとスピネットさんですね。こちらでお待ち下さい。」  
顔は知らなかったものの、ココロの旅話で二人のこと聞いていたランク。  
紳士的にテーブルへご案内しました。

「僕たちのこと知ってるんだ？」  
楽器を背負い、旅慣れしてそうな雰囲気のお兄さんは、

意外な出来事に、チェレスと顔を見合わせながら喜んでいました。  
まだ、国外ではほとんど知られていない旅芸人の二人。  
ココロの知り合いであろうモカとランクでしょうが、

旅先で、顔も知らない人から突然名前を呼ばれることにとっても感動した様子でした。

お昼ごはんを食べたばかりのココロは、  
裏庭のベンチで食後のクッキーを楽しみながら雲を眺めていました。

「みっちゃんは、今度どこ行くの？」

ぼお～っと空を仰ぎながらソトミチに話しかけるココロ。

「窓の国を目指しながら、2つ、3つ周ろうかなと思ってる。」

ソトミチは色々な国を旅して、街のことを文にまとめる、紀行作家さんです。

この街（サウスクラフト）では珍しい袴姿をしており、

ココロと同じくメガネっ子の落ち着いた男の子です。

彼の書いた本は、まだ国外を旅したことの無い子供たちにとっても人気です。

この街の職人たちが書いた本を集めた市民図書館でも、

ソトミチの本は保管され、いつでも子供たちが見れるようになっています。

彼だけでなく、アトリエ・ココのみんなも、

自分たちでまとめた手作り本や日記などをこの図書館に寄贈しています。

本は書いた人の住所別に並べられているので、街を散歩している感覚で本を見ることができます。

〔バンッ！〕

モカが扉をおもいきり開けて中庭に出てきました。

「あっ！こんなところにいたっ！もぉ、休憩は決まった場所でしてよっ！」

ココロはお昼を食べ終わったあと、少し休憩をするのですが、

ある時は屋根の上にいたり、またあるときは水を張っていない浴槽の中で本を読んでいたりと

まるでかくれんぼをしているかのような場所で休憩していたりします。

急な用事の時は、今回のように、メンバーが店内を探し回ることもしばしば。

「お～モカ。なに？どうしたの？」

モカの反応にも特に慌てることも無く普通に答えるココロ。

「えっとねっ！音楽家さんが来てるの！ 良いから早く来て！」

ココロの腕を掴み店内に引っ張りこむモカ。

「ちょいとモカさん？ドア閉めないと！」

この間、カモメの団体さん入ってきて、大騒ぎになったことを思い出しドアを閉めたがるココロ。

モカの慌て方が気になったのか、ソトミチもすぐドアから店内に入り、ドアを閉めてくれました。  
「ありがとう、みっちゃん！」

「もしかして、このクッキー、君が作ったの？」  
スピネットは運ばれてきたクッキーをおいしそうに食べながら、ランクに話しかけました。

「はい、そうですが、いかがでしたか？」  
「おいしかったよ。実はね、2, 3年前だったかな。  
ココロオーナーに同じコーヒークッキーを貰ったんだよ。」  
この人が作ったんだあ、という感じでランクを見つめるスピネット。  
どうやら、ランクのクッキーをとっても気に入ったご様子。

ココロがモカに引っ張られて来ました。  
慌しさにチェレスとスピネットが振り返りました。  
「わああ！チェレスピ！ひさしぶりい！」  
すぐに知ってる顔ぶれに気づいたココロ。  
「ココロ～久しぶりだねえ、元気だった？」  
「というか、名前をまとめて呼ぶなよ！」  
突然の再会に3人は大喜び。そして積もった話を一気に始めました。

モカとランクは久しぶりの再会の邪魔をしないよう  
カウンターの裏に引っ込みました。  
「ねえねえランク？あの二人すごいキラキラしてるよね。」  
一緒に色んな街を旅していると聞いた二人に憧れの眼差しを見せるモカ。  
「そうだね。オーナーみたいに何かやってくれそうな感じがするね。」  
「うんうん、でも、オーナーより落ち着いてる感じだよね。ほら、今もオーナーの方がはしゃいでる。」  
ソトミチがカウンターに座りました。  
「あの人たちって、音楽家さん？」  
「そうだよ。前にオーナーが音色王国に行ったときに、知り合った大道芸人の友達でね。  
最初は国内だけで活動してたみたいだけど、今は全国を旅する旅芸人をしてるらしいよ。」

楽器は全部、壊れたり使われなくなったものを修復して使ってるんだって。」

「へえ〜」

ソトミチとモカは一緒に感嘆しました。

しばらくすると、ココロが立ち上がりました。

「お〜い！今から演奏会始めるぞお〜！」

ココロの声が、店内にいたメンバーやお客さんに届くと同時に、雰囲気が一気に明るくなりました。

今から何かが起こる直前のワクワクやドキドキ、

ココロはみんなや自分自身もそういう気分にするのが大好きです。

「ねえ、ココロ、あそこ使わせてもらうね」

チェレスが指差したのは、リヨが受付をしているお手紙配達窓口前のスペース。

窓口から身を乗り出すリヨにご挨拶し、大きな箱の中から楽器を取り出すチェレス。

みんな何が出てくるのか興味津々です。

一方スピネットはというと、チェレスの元に向かいながら

ギターのストラップを肩から掛けなおし、すでにゆったりと弾き始めていました。

いつの間にか始まった演奏会。

お昼過ぎの、のんびりした店内に心地よい音色が響き渡ります。

突然聞こえてきた暖かい音色に気づいたアンティロやモルフもカフェコーナーに集まってきました。

お店の外からも気になった人たちが覗いています。

いつもより少し早めにお昼寝を終えたアンティロも、テーブルにつきました。

まだ、少し眠たそうにしながら、テーブルの上に両手を伸ばし、へにゃんとなっています。

部屋で寝てたら良いのに、どうやらスピネットのギターを聴きながら寝たいご様子。

しばらく、スピネットのソロ演奏が続いたあと、

チェレスも小さなアコーディオンを弾きはじめ、少し明るいテンポの曲に変わりました。

すると、モカは自分のワクワクセンサーに反応したらしく、踊りたい気分になってきました。

「ねえ、踊っていいかな？」

ピョンピョンと跳ねながらココロに話しかけるモカ。  
ココロがチェレスに聞くと、彼女はモカに視線を送り、にっこり頷きました。

「ちょっと待って！」と言って自分の部屋に戻るモカ。

疑問に思いながらも待っていると・・・

〔タンタンツタタンツタンツ 〕

衣装チェンジしたモカが、ステップを踏んで再び登場。

するとチェレスとスピネットは、そのモカのステップに合わせて、  
アップテンポの曲に変え、そのままモカのダンスステージに突入して行きました。

いつの間にか、手拍子が鳴りはじめ、店内はまるで楽しいお祭り状態になっていました。

賑やかな演奏会になり、

ミュージヤココ、それにお客さんも沢山集まってきました。

「良い色だなあ・・・」

ココロはボソってつぶやきました。

「なあランク、多くの人との一体感を作ることって、オレたちには出来んよなあ。」

二人の演奏と、それを取り囲む楽しそうな人たちを目の前にして、

心を大きく打たれた様子のココロ。

「そうですね。でも僕たちは、自分のやれることを精一杯やれば良いと思いますよ。

僕らは僕らの出来ることを頑張りましょう。」

「へへへ、まあね。にしても、秀才で野心家だった頃のお前からは想像できん言葉だねえ。

オレは昔のお前も好きだったけど、今のお前はもっと好きだ。」

「今の僕はオーナーやモカのおかげですよ。特にモカは僕に新しい世界を教えてくださいました。」

「オレもあの子には色々教えてもらったかな。笑顔の力というか、元気の力というか・・・」

〔パチパチパチパチッ！〕

丁度話が終わろうとしたころ、拍手が聞こえて来ました。

どうやら、演奏もひと段落したようです。

気づいたらいつの間にか20人ほどの人が集まっていた。

「みなさん、こんにちわ。音色王国から来ましたチェレスと・・・」

「スピネットです。」

スピネットが小さな音で演奏をしながら、二人の自己紹介が始まりました。  
二人は楽器の修繕や供養をする職人だということ。  
倉庫に眠ってた使われなくなったり、壊れた沢山の楽器を、  
本来の姿に戻してあげたくて大道芸人を始めたこと。  
音楽の祭典に参加し、自分たちの音楽に対する甘さを実感し、  
一から楽器と向き合うことにしたこと。  
色々な演奏家さんや聞いてくれる人たちと出会ったこと。  
そして現在、大道芸人を始めた時の気持ちを思い出し、  
初心を大切に、旅芸人としていろんな街を周っていること。  
最後に、楽器という道具は僕らとみんなを繋げてくれる架け橋だということ。  
道具は僕たちの友達なんだということをお話してくれました。  
少し長い話でしたが、二人が伝えたい言葉にみんなは最後まで耳を傾けていました。

話を聞いていたミューチは、手に持っていた大きな筆を突然抱きしめました。  
そばに居たユコは、それを見てにっこりしていました。

演奏会はその後も続きました。  
途中、みんなに色々な楽器を手にとってもらいながら説明したり。  
モカが再び衣装チェンジして、ダンスショーの第二部、第三部と続いたり。  
あっという間に楽しい時間は過ぎ、気づけば夕方になっていました。

お客さんも帰って、静かになった店内。

「今日はありがと。」

アトリエ・ココの代表者としてお礼を言うココロ。

「こちらこそ。」

チェレスとスピネットも楽しい時間が過ごせてとっても満足そう。

「今日はうちに泊まってって良いよ。」

「ううん。ありがとう」

チェレスが申し訳なさそうに答えました。

「もう何処かに宿を取っちゃった？」  
「違うの。これから国に帰らないとだめなの。」

「え?!今から帰るの?!なんで?!」  
ココロだけでなく、みんなも驚きました。  
「ある楽器を修繕しないとイケないの。」  
話を聞くと、旅先で「300年前の大きな自動演奏型のパイプオルガンが見つかった」と連絡を受け、急遽修繕のため帰ることになったとのこと。  
しかし、旅の最後にどうしてもココロに会いたくて一日伸ばしてくれたようでした。  
「私たちの旅は今日で終わり。明日からは楽器修繕屋のチェレスピかな。」  
これから旅芸人としての活動は出来なくなる二人。  
でも、彼らには寂しさは無く、  
気持ちはすでに楽器を早く見てあげたいという想いになっていました。

出発の準備も終わり、玄関先で見送ります。  
別れるのがとっても悲しそうなモカは、チェレスによしよしされていました。  
ランクはお土産のクッキーをスピネットに渡し感謝の言葉を伝えました。  
「旅芸人が出来なくなるのは、なんだか寂しいね。」  
「でも、大道芸人としてはこれからも続けていくつもりよ。国内だけになっちゃうけどね。」  
ちょっと寂しそうなココロでしたが、チェレスの言葉で少し明るくなりました。  
「楽器が自分たちで演奏してくれたら良いのにね。」  
「そうだね。ついでに足とか生えてくれたらもっと良いね。」  
ココロの冗談に、チェレスも合わせてくれたおかげで、みんな明るく笑顔になりました。

お別れをして、馬車に乗り込み、出発してしまったチェレスとスピネット。  
しばらくすると、馬車から音色が聞こえてきました。  
「また会おうね、って言ってるよ。」  
ユコにはそう聞こえたようです。  
彼女の言葉でその場にいたみんなもそう聞こえてきました。

おしまい。